

「沈香屑 第一炉香」における母娘関係

李 金然

1. はじめに

1944年に出版された小説集『伝奇』¹は、作者の張愛玲(1920~1995)を当時上海においてもっとも売れる作家にした。本稿で対象として扱う「沈香屑 第一炉香」²(以下「第一炉香」と表記する)は張愛玲の中国語小説のデビュー作であり、その『伝奇』の始まりである。『伝奇』に所収される小説はすべて、いわゆる「洋場社会」³の上海や香港における人々の生活の実相と人間関係を語っている。しばしばその舞台となるのが、家庭という限られた空間である。その舞台では男性よりも、女性のほうがいっそう多様な演技を披露している。それらの女性たちは「母親」と「娘」という立場の異なる役で同一物語に登場し、互いに立ち向かうというパターンがほとんどである。しかし、この「母親」や「娘」という立場が作者によって先験的に設定されたためか、「女」更に「人間」というカテゴリーに収斂され、しばしばその間にある非対称的な関係は見落とされてしまう。そこに着目する研究は非常にまれにしか見られない⁴。とりわけ「第一炉香」に登場する二人のヒロインは伯母と姪として設定されているため、『伝奇』における母娘関係に言及するわずかな研究の中でも、常に研究対象からは排除されている。しかし、「第一炉香」抜きで『伝奇』の母娘関係を考察するのは、不完全だと思われる。何故なら、「第一炉香」における伯母と姪との関係は、『伝奇』において、ほかの母娘関係と一貫性を有しているからである。特に、「張愛玲文学の核心作」⁵と称される小説「金鎖記」の母娘関係とは、かなり共通する部分が多い。「第一炉香」はデビュー作であったため、張愛玲はあえて読者の反応を考慮し、「金鎖記」のようなストレートな母と娘との役割配分を控えたのではないかと思われる。後で詳述していくが、梁太太と薇龍の立場を、長年離れ離れとなっていて再会した母親と娘として設定しても、ストーリーの展開に何の変化もきたさない。だとすれば、『伝奇』における「母親」と「娘」との物語の系譜の裏に、「第一炉香」のヒロインたちも隠れているのではないか。

本稿では、「第一炉香」における伯母と姪としての二人のヒロインのかかわりを、『伝奇』収録の他作品における血縁的な母親 - 娘と同等の母親と娘との関係と見なす合理性を明らかにしたうえで、両者に同時に着目し、家父長社会の背景における両者の葛藤について考察を行う。

2. 母娘同然の伯母と姪

2.1. 「第一炉香」のあらすじ

「第一炉香」では、上海出身の女子高校生・葛薇龍が香港で娼妓も同然の「交際花」に成り果てるストーリーが綴られている。薇龍は香港で、学業を続けるため、上海に戻る両親と別れ、伯母(父親の姉)の梁太太(= 梁奥様)に援助を求めた。梁太太は昔、富豪の妾になろうとし、薇龍の父親をはじめそれに猛反対した実家の親族と決裂しているが、薇龍を男をあさる餌として利用するために自宅に留める。薄々彼女の下心に気付いた薇龍だが、つい梁太太の思う通りに振舞わせられてしまう。さらに、プレーボーイの喬琪喬に恋をしてしまい、彼と梁太太の計らいで結婚することになる。そこで薇龍は喬琪喬の妻となると同時に、彼の望む生活を維持するために娼妓となっていく。

2.2. 梁太太と薇龍

「第一炉香」において、薇龍は梁太太の姪として登場するが、実際に、梁宅に入り込んだ後、梁太太の娘も同然となる。なぜなら、生活状況においても、経済的にも、精神的にも薇龍は梁太太に頼り切っており、彼女にコントロールされているからである。まず、両親と離れた薇龍は終始梁宅に留められ、梁太太と暮らしを共にしている。彼女は日常生活から社交活動の振る舞いまで、すべて梁太太の決められた通りにせざるをえなかった。学費の援助を求めて居候する薇龍は、いうまでもなく経済的には全面的に梁太太に依存している。そのうえ、薇龍は自らの意志で、梁太太を母親代わりと見なしたと考えられる。援助を求めに梁宅に来た場面で薇龍が、「伯母様に育てていただければ、私は伯母様だけの子供になりますわ」(p.121)と言い放つこのセリフは、梁太太の娘としての身を引き受ける覚悟で梁宅に入ったことを示していよう。さらに、梁宅に入った後、メイン・ストーリーから薇龍の実母は完全に退場し、姿を消してしまっている。たとえ薇龍が病に倒れたシーンでさえ、古き良き郷愁に駆られる薇龍の心の内には、実母に助けを求める思いもなければ、実際に彼女のもと

に実母からの便りもなかった。薇龍の心の中においても現実においても、実母の影が極度に薄くなっていたことが分かる。梁宅での生活が始まると共に、薇龍は心身ともに梁太太の権威を認め、彼女を実母に取って代わった唯一の家長と見なしていく。

また、このように子供が10代になってから初めて、母と娘との関係を物語に浮上させる書き方は、『伝奇』におけるほかの小説にも見られる。「金鎖記」においても、娘・長安は12歳で唐突に初登場する。その前に、ほぼ同じ年齢の息子が描かれたが、娘に対する言及は一言もなかった。

以上の理由により、本稿では梁太太と薇龍を母親と娘と見なして分析していくことにする。

3. 「第一炉香」における母娘関係

「女」か「人間」に収斂されてしまう『伝奇』における母親と娘の間には、実際に、その関係の非対称性が潜んでいる。その非対称性はストーリーを通して、片方は優勢、片方は劣勢に立つという強弱対比的な関係として表れてくる。梁太太と薇龍の間にも、そのような強弱の対比が際立っている。本稿では、この立場の対比を示すものとして、「強い」と「弱い」をキーワードに、梁太太と薇龍との関係を考察していきたい。

3.1. 「強い」と「弱い」

梁太太と薇龍をはじめ、『伝奇』で描かれた母親と娘における強と弱には、二重の意味があると思われる。まず、性格などいわゆる「人間性」の要因からくる、支配するかされるか、服従するかしないかというような力関係の強弱である。それだけではなく、この概念は家父長制に対する攪乱性の強弱としても指摘できる。ここでは、課された役割や機能を内面化し、家父長制の基準にふさわしく振舞おうとする母親や娘を「弱い」と見なす。逆にその文化的属性を部分的または全面的に抵抗し、男性家長を去勢するような大胆な行動を取り、家父長制に攪乱性を持つものを「強い」とする。

『伝奇』においては、この二つの要素からくる強弱は常に合致している。

「第一炉香」の場合は、上述したストーリー展開からすると明らかに梁太太は強いが薇龍は弱い。ところが、こうした強い母親 - 弱い娘という対のパターンは『伝奇』においてマイノリティーであり、ほかには「金鎖記」における七巧と娘の親子だけがその例に含まれる。より多く見られるのが弱い母親 - 強い

娘の対である。『伝奇』において、母娘関係に関わる九編の小説のうち、五編は後者のパターンに属する。

ところで、興味深いのは、こうした母娘の登場人物に作者が与えた呼称の特徴である。娘のほうはほぼ全員自分の名前を持っているのに、母親のほうでは七巧以外に自分の名を有する人物は見られない。もっとも、「瑠璃瓦」における姚家の四、五、六番目の娘のように、まったく登場していないにもかかわらず、ただの「姚家の娘」や「×番目のお嬢様」で片付けられることなく、きちんと「織織」「端端」「瑟瑟」という名前が付けられている例も見られる。一方、七巧以外の母親に対する呼称は「夫の姓＋夫人／太太(奥様)」にすぎない。たとえば「花凋」においては、主人公の川嫦(娘)とは出場の頻度が相当する彼女の母親でさえ、その呼び方は終始、「鄭(夫の姓)夫人」とされている。

さて、七巧と同じく強い母親である梁太太も「夫の姓(梁)＋太太」という呼び方を与えられているが、この表現には特別の意味が含まれていると思われる。彼女は父兄に決められた正妻となる道を拒否し、親族と決裂してまで富豪梁氏の四人目の妾となる道を強引に進んでいる。実家の家長にとっては、彼女の婚姻自体がこの上もない恥であるはずだ。夫の姓の梁及び妾の身分を皮肉っているような「太太(奥様)」という呼び方は逆にいっそう、「強い」梁太太の家父長制に対する攪乱性をよく表すと思われる。

こうして、強い者の多い娘たちと強い母親には、作者は必要以上と言えるほどに名前を付けている。このように単なる名前の有無を人物の主体性に結びつけて考えるのは安易すぎるかもしれない。しかし、家父長制に対して、より攪乱性の強い者を作品においてもっと躍如させようとする作者の戦略は明らかだろう。

3.2. 梁太々：強い母親

本節では、梁太太に着目し、彼女が持つ家父長制への攪乱性、及び娘としての薇龍に関わる姿勢や与える影響を考えていく。

3.2.1. 強い娘から強い妻、そして強い母親へ

「第一炉香」に登場する際、梁太太はすでに50歳もすぎた寡婦となっている。それ以前のストーリーは直接書かれていないが、彼女が強い娘から強い妻へ、そして強い母親へと涉っていく一貫性を有することが、登場人物のセリフや会話から推察することができる。

まず、強い娘としての梁太太は主として、妾となる選択を通し、儒教的家父長制が娘に課した「孝」という掟を破ることで、攪乱を起こしている。前述のとおり、梁太太は父兄が決めた結婚を拒否し、家父長制における娘の役割、即ち「孝」の名の下で、男性が家長となる家と家の間の交換物としての役割を、不完全ではあるが、拒否している。その上、自主的に婚姻を決めただけでなく、妾となることを決めている。彼女のその選択に、薇龍の父親をはじめ、父兄は「自墮落に甘んじて、家風を台無しにした」(p.120)と判断を下している。このことを別の視点から見たならば、彼女は自分が進んだ道を通じ、封建的価値観や儒教社会の道德観念に挑戦を投げかけているとも解釈できる。もっとも、彼女が選んだ結婚は愛などのためでなく、「断固として齡耳順を越しているお金持ちと結婚し、ひたすら彼の死を待ち続けた」(p.142)と明示されているように、ただの金目当てにすぎない。

また、妾(妻)となった梁太太は落ち着き、決められた妻の役割を受け入れたわけではない。彼女は不倫の手段を取り、妻として課された「貞」の掟を破る。梁太太の不倫をめぐって、女中・睨児が梁太太本人と次のような会話を交わしている。

旦那様の生前、喬家の一家三代の人は一日中ひっきりなしに電話をかけてきて、こそこそやって、あらゆる手段を尽くして若奥様(=梁太太)を惑わせたりしていましたね。(中略)今になって、若奥様とお友達とみんな堂々と付き合うようになったのに、彼らがもったいぶったりするなんてね。(p.117)

ここからはっきりと分かるように、夫の生前から梁太太はすでに多数の不倫相手を持っていた。そのうえ、寡婦になった後いっそう、「無数の愛人」(p.124)との交際を楽しんでいる。

さらに、梁太太は女性において最も重んじられる役割、即ち産む機能によって跡継ぎを生産する役割も、梁太太は拒否したと思われる。小説において、梁太太に何故子供がいないかは明らかにされていないが、何人もの愛人を囲っているため、たとえ夫が性的に不能であったとしても、妊娠する気があれば、子を孕むことも難しくないはずである。それに、怒鳴っている最中に怒ると皺がよる恐れがあると注意されたら、「たちまち穏やかな愛想のよい顔つき」(p.118)になるほど、非常に美容に注意をはらう女性なので、妊娠によって体型が崩れ

ることを恐れたと類推される。ゆえに、彼女自らが産むことを拒んだ可能性は極めて高い。ところが、そこに薇龍が現れることで、一種の母娘関係が生じることとなる。

『伝奇』における母親像の大多数を占める弱い母親は、一般的に父親（もしくは父の法）を媒介として娘に接している⁸。それに対して、梁太太や七巧のような強い母親は、何の媒介にもよらず、直接に圧力をかけたり、支配したりすることで娘に関わろうとするのが特徴的である。その詳細を次節で論じていく。

3.2.2. 同一化を強要する母親

攪乱性に満ちた強い母親は、儒教的家父長制の秩序から離脱している。ゆえに、秩序に入り込んでいる弱い母親と異なり、父親（／父の法）を経由せず、直接に娘に接している。こうした強い母親が娘を見る視線には、見逃せない点がある。それは、「同性」の娘を見る目と「異姓」の娘を見る目という二つの視点である。まず、自分と血筋でつながり、生活を共にし、同じ女性である娘に、強い母親は自分と同質の部分を見出している。秩序から離脱し、孤軍の境遇に陥る彼女たちは、その同質の部分を極端まで拡大し、同性の「我が娘」を仲間にしようとする。そして一方、夫（／父親）の血筋を受け、価値観・道徳観なども継ぐ、自分とは違う姓を持つ娘に、異質の部分も見出している。無意識に秩序に抵抗しようとする強い母親はある種の報復心理に駆り立てられ、その異質の部分を強引に抹殺し、「父の娘」を秩序から遠ざけようとする。同質の部分の拡大においても、異質の部分の抹殺においても、同じ結果が導かれる。つまり、娘への同一化強要である。

梁太太の場合、ほかの母親と異なり、婚家・梁家よりも、薇龍の父親をはじめとする実家・葛家のほうが自分を拘束した秩序のシンボルとなっている。薇龍が引っ越してきたとき、迎えの指図をする梁太太は女中に薇龍のことを「あの葛家の子」(p.125)と呼んでいる。事実上は薇龍と同じ葛という姓を有しているが、むしろ彼女は自分を梁家の一員と自認していると言える。彼女にとっての薇龍がまさに、父の法を意味する葛家の血筋を受けた「父の娘」であり、七巧にとっての娘・長安と同じような存在だろう。

薇龍に同一化を強要する梁太太は、二つの策を施していく。つまり、ライフスタイルの統合と価値観の転覆との二つである。

具体的にライフスタイルの面では、梁太太は三つの段階において、薇龍を自

分に統合しようとする。まず、金銭援助のみで、一緒に暮らさずに学校の寮に入るといふ薇龍の提案を却下し、梁宅に入居させた。薇龍はこれを「少し躊躇ってから」(p.121)承諾している。そしていったん梁宅を出て振り返って考える薇龍は、「私ときたら、自らこの不気味な世界に入り込んだ以上、たとえ崇られても、ほかに誰のせいにするのができようか」(p.122)と危険性を感じてはいても、結局はそれを断れていない。次に、薇龍を自分の生活に巻き込むために、梁太太は同居早々、薇龍にとって未知で異質な世界、いわゆる社交界に彼女を放り込んだのである。入居する前にすでに用意された社交活動用の洋服をこっそり試着した薇龍は、梁太太の意図に気付き、「これは妓楼が新人を買い上げる時と同じ手口ではないか」(p.126)と悩んでいたが、三ヶ月後、彼女は「すでにここでの生活に病み付いてしまった」(p.128)ようになったという。更に、実家に帰り、秩序に戻ろうとする薇龍に梁太太は足止めの罟を仕掛ける。それはプレーボーイ・喬琪喬に圧力をかけ、薇龍と結婚させたことである。結婚後の薇龍は、「梁太太と喬琪喬の二人に売り渡されたも同然で、喬琪喬のために金を稼ぐか、梁太太のために男をあさるかして、毎日大忙しだ」(p.156)とある。つまり、この結婚は実際に、梁太太と同じようにたくさんの愛人と交際し、高級娼婦としての日々を送るよう、薇龍に強いたのである。ただし、梁太太が夫に内緒で自分の希望で愛人を困っていたのに対して、薇龍は夫の容認の下で、その夫に仕送る金のために愛人を作る。だが、程度の違いはあっても、両者はそろって家父長制の秩序から離脱しており、それへの攪乱性を見せている。

一方、ライフスタイルの統合と同時に梁太太は、家父長家庭の血筋を受けた「父の娘」としての薇龍の従来の価値観を変えようと図っている。学業を続けるために援助を求める薇龍は、学校を出たら仕事を探し、働こうとした。また、家父長制家庭に育った彼女は、はじめの梁宅を「濁った川」(p.119)「古代の皇陵」「不気味な世界」「清朝末期のみだらな雰囲気留めた」(p.122)ところなどに喩えていたことから、伯母・梁太太とは異なった、家父長制的な道德観に従う貞操観や結婚願望を持っていたことが推測できよう。そうした彼女に会ったとたん、梁太太は辛辣なことばで薇龍の父親を非難し、旧習を守る彼の貧困と自分の裕福とを皮肉に比較し、薇龍のうちに作られた父親という従来の価値体系の偶像を砕いてしまう。その後、上流階層の社交界で虚栄や道楽を彼女に身につけさせたうえ、貧乏な生活ではすぐに老けてしまうと脅かしたり、喬琪喬にとどまらず、たくさんの愛人と遊ぶべきだと説得したりし、極力自分の価

値観を受け入れさせようとしている。そのほか、梁太太の口からではないが、まったく同じような価値観を持つ彼女の手先のような人物、女中・睨児の口を通して、現状における仕事の不足と低賃金が強調される。薇龍の初志、即ち学業を終え、仕事につく考えが、その説得でつい動揺してしまい、「彼女はもう昔みたいな単純な人ではなくなった。学校を卒業して社会に出て仕事をするには、自分のように、きれいだが特別に能力を持っているわけではない女の子にとって、妥当な道とは思えない」(p.153)と、考え直している。要するに、金銭面であれ、道德面であれ、仕事や結婚など秩序に従う形の進路に対する予想でさえ、あらゆる面で薇龍が持っていた価値判断の基準を、梁太太は覆してしまう。

以上から、薇龍を自身へ同一化させようと強要する上で、梁太太は全面的な勝利を収めたといえよう。

3.3. 薇龍：弱い娘

前述したように、家父長制家庭で育てられた薇龍は、秩序から逸脱することを考えていなかったにもかかわらず、強い母親梁太太に同一化を強要され、次第に、彼女と同じような攪乱性を持つようになったのである。本節では、彼女に焦点を当て、その変化をめぐる葛藤を分析していく。

3.3.1. 結婚願望

儒教的家父長制の中国において、「女は弱いが、しかし母は強い。儒教における倫理関係では、縦は『孝』であり、横は『貞』である」⁹。ただし、ここでいう「母」は『伝奇』において設定された立場としての「母親」とは異なり、中国の家父長制において、その一環として機能する女の役割や身分といって良いだろう。縦の秩序である「孝」によって、母は娘より上位に立ち、更に跡継ぎの息子を産んだ母が姑となれば、その地位はまたワンランクアップする。地位には権力や利益が伴う。言うまでもなく、秩序における限り、娘からこうした母(姑)に「昇格」するには、結婚が唯一の道である。したがって、娘たちは無意識にその道を受け入れ、当たり前のように強い結婚願望を持つようになっていく。『伝奇』で描かれた娘たちの物語はほとんどその結婚願望をめぐる展開している。薇龍も例外なくその娘たちのうちの一人である。

「第一炉香」において、いくつかの心理描写によって、薇龍の結婚願望が露呈している。代表的な例として以下の三つをあげよう。まず、不名誉な伯母と

暮らすのを躊躇っているとき、薇龍は真先に伯母と暮らすことによって自分についても良からぬ噂が立ち、結婚の支障になるのではないかと心配してしまう。その後、薇龍は梁太太に彼女の愛人との交際を強いられる危険性を感じ、梁宅を離れることを考える。そこで、薇龍が思いついた唯一の方法は「金持ちを一人見つけ、嫁いでいくほかない」(p.142)、つまり結婚である。そして、喬琪喬との恋愛で挫折し、上海の実家に戻り、「新たな人生」を始めようと思う際、薇龍は仕事に就く道を容易に諦めるが、「勿論やはり結婚したほうがいい」、「新たな人生はつまり、新たな男だ」(p.153)と言って、依然として結婚願望を固めていくことになる。強い母親の下で色々と変わっていく薇龍も、結婚願望だけは終始一貫している。ただし、彼女は一度だけ愛さえあれば結婚しなくてもいいという考えを持ったことがある(p.147)。しかし、それは喬琪喬と性行為を行った直後のことであり、幸福感に満ちた彼女の心の中では、「喬琪が正しかった。彼はいつも正しい」(p.147)という喬琪のすべてを受け入れるような無償の愛があふれている。その場ではつい結婚しないという彼の意思に従ったが、それは情事直後の一時的な情緒の揺らぎにすぎなかったのではないか。

このように、薇龍は結婚を通して、娘からより上位の母に昇格し、秩序に溶け込んでいくことに憧れている。つまり、縦の「孝」の倫理に従って、弱い娘の薇龍は家庭内の女、即ち妻や母の役割を内面化している。

一方、前文で触れたように、そもそも薇龍は梁太太と異なる貞操観・道徳観を持っている。つまり、彼女の中では横の秩序である「貞」の倫理によって、家庭外の女、即ち娼婦の役割を否定する価値観が形成されている。この妻と娼婦という二元的な考え方は、結婚や性行為などに対する薇龍の見方を大きく左右している。そこに、「愛」の要素が加わり、愛、結婚と性に関する薇龍独自の論理が成立している。愛を重視し、結婚願望を持ち、娼婦を否定するが(まだ)夫でない男性(喬琪喬)と性行為を行ってしまった彼女にとっては、もっとも理想的な形は勿論、愛のある既婚後の性行為であり、一方どうしても避けたいものは愛のない未婚中の性行為だろう。愛のある未婚中の性行為と愛のない既婚後の性行為は、その中間に位置すると思われる。

3.3.2. やむなく離脱し、また復帰に失敗する弱い娘

梁太太に同一化を強要された薇龍は、ついに家父長制の秩序から離脱していくが、しかし、秩序に憧れる弱い娘の彼女は、進んでそれを受け入れたわけで

はない。反対に、秩序への復帰を無意識に図ったのである。むしろ、復帰の試みを通して、弱い娘は強い母親を忌避し、抵抗しようとしている。ところが、離脱であれ復帰であれ、弱い娘が主導できるようなものではない。

(1) 離脱

薇龍が梁太太に彼の生活に巻き込まれる際に、もっと選択の余地があったという論説もある¹⁰。しかし、果たしてそうだろうか。彼女が当面していた肝心な選択は二つあり、それは梁宅に入居するかどうか、社交界で梁太太の男をあさる餌になるかどうかの二つだろう。

それについてまず、ただ梁宅の代わりに寮に入るだけでは、やはり梁太太に強引に統合されることが避けられないと思われる。何故なら、金銭の援助をもらった以上、たとえ予想通り薇龍は卒業できても、借金の返済に責められた場合、同様に強い家長としての梁太太に妥協せずにはいられないと推測できよう。そして、薇龍が梁太太に利用されることを拒否できるかについて考えてみよう。梁宅に入る前に、薇龍は「私自身が品行正しく身を固めていれば、彼女(=梁太太)もきっと礼をもって応対してくれるでしょう」(p.122)、と自分に言い聞かせ、梁太太の生活に迷い込まないよう決心した。しかしながら、梁宅で初めての朝を迎えた薇龍は、入居早々梁太太に逆らう女中睇睇が追放される様子を目撃してしまう。もともと気に入っていたはずの女中を容赦なく追い出し、今後の進路まですべて塞いでしまう伯母の姿を見ると、薇龍の決心も動揺するのは当然だろう。睇睇の結末は、いわゆる薇龍のもう一つの選択肢の結果を暗示していると言えよう。要するに、強い母親の下では、秩序にとどまる選択肢は弱い娘に残されていないと思われる。

(2) 復帰

やむを得ず秩序から離脱してしまった薇龍は、結婚や実家に帰ることを手段として、秩序へ復帰しようとする試みを重ねている。

最初に復帰する必要性に気付いたきっかけは、梁太太の愛人との交際を強いられそうになったことである。つまり、最も避けるべき愛のない未婚中の性行為が差し迫ってきたのである。その瀬戸際に、脱出方法として、薇龍の頭に浮かんだのが喬琪喬の夫としての機能である。確かに、結婚を通して秩序へ復帰するのが薇龍の目的であるが、しかし、対象の選定はあえて「愛」があるためである。『伝奇』において、薇龍は極めて珍しく男に愛を持つ人物と言える。『伝奇』における娘たちは一般的に結婚願望を持っているが、それをほぼ昇格する

ための手段としか思っていない。ほとんどの娘は男に対して打算的な計画を立て、経済のための結婚、即ち愛のない既婚後の性行為を選ぶ⁴¹。薇龍はそれに反して、喬琪喬を愛するため、愛のある未婚中の性行為を行ったのである。しかしそれも、同じく中間にある愛のない既婚後の性行為も薇龍にとって同様に物足りない。ゆえに、愛さない人との結婚を断念し、その道で秩序へと復帰するのを放棄した。喬琪喬に対する愛は、自分の一方的なものにすぎないと分かっていても、薇龍は懸命に未婚中に行ってしまった喬琪喬との性行為を、愛のある既婚後の性行為という理想な形に変え、正当化させようとする。そこで、犠牲的な愛と結婚願望が絡んだあげく、梁太太によって実際の娼婦となる婚姻に落とされてしまう。いわば、家庭内の妻と家庭外の娼婦を二元対立的に考えていた薇龍自身に、その二元が統一してしまったのである。しかも、喬琪喬は薇龍が「7、8年経って稼げなくなったら、また離婚すればいい」(p.156)というつもりで、結婚を承諾している。いずれにせよ、薇龍は妻への昇格に成功したとは言えない。また、「薇龍のこの香炉一つの香も、間もなく燃えさしなく灰燼となってしまうだろう」(p.158)という文末にあるメタファーが示唆しているように、秩序の一環として機能し、「孝」の倫理によって上位に立つ「母」に昇格するチャンスがあるとは思えない。つまり、薇龍の復帰は実際には失敗しているのである。そのうえ、結婚後の薇龍は婚家に行けず、以前のまま梁宅にとどまり、結局強い母親の支配を逃れられずに、ますます同一化させられてしまう。懂れていた秩序に自分の立つべき位置が見つからず、苦痛と混乱に陥っている。しかし、先行研究のようにその結末を単に彼女の虚栄心や欲望のみに帰すと、先述した家父長制に沿った結婚願望や従来女性の美德として唱えられていた犠牲的な愛、及び家父長社会における女としての立場など、薇龍が内面化していた要素を見落としてしまうだろう。

「第一炉香」において作者張愛玲は、家父長制の文化旧習はもちろん、それの上に飾られた自由恋愛のような新時代の産物までも、懐疑的な視点から提示していると言えよう。愛を剥脱させた先験的な母娘関係を張愛玲は描こうとしているのではないか。『伝奇』におけるほかの母娘と同様に、薇龍に対して梁太太は母性愛を持っていなければ、梁太太に対して薇龍も、30年代の女性作家によく描かれた郷愁のような母親に対する愛も抱えてはいない。

4. 終わりに

張愛玲は創作談のようなエッセイ「自分の文章」¹²において、自分が好んで描いた人物像が、あまりに重い歴史と時代の重圧を背負っているのに、その重圧の存在にさえ気付かず、革命や闘争を起こすようなヒーローではなく、みな「不徹底的な人物」¹³だとまとめている。梁太太も薇龍もそのような人物として典型的な母娘と言えよう。梁太太は家父長制に強い攪乱性を持っているが、彼女にはそれに対する自覚もなければ、母親としての自分から娘としての薇龍へと伝えるすべもない。彼女はひたすら高圧的手段を取り、娘を自分に統合しようとする。一方、家父長制により女性に課された文化的属性を内面化した薇龍は、秩序の内での「昇格」に憧れるが、母親としての梁太太に妥協し、その枠から連れ出されてしまう。また、彼女はある程度「母親」の攪乱性を継承したように見えるが、その真意を察せず、「母親」を逃れ、秩序へと復帰しようとする。しかしそれも、また失敗に終わる。こうした中途半端な無自覚者（せいぜい半自覚者）の母娘は、たとえ形式上の伝承があるとしても、実際にはより深刻な断裂と隔たりができてしまう。結局、同じく秩序から離脱しているにもかかわらず、二人はその外側で手を結ぶことはなく、それぞれ消え去ってしまう。梁太太と薇龍の間にある乖離、疎隔、孤独や愛の剥脱された関係は、張愛玲が『伝奇』に定めた基調である「蒼涼（もの寂しさ）」の表れと言えよう。

前述したように、「第一炉香」は常に張愛玲文学の母娘関係を扱う研究の対象からは排除されてきた。しかし実際に、梁太太と薇龍という「不徹底」な人物像の設定にせよ、伝承あり断裂あり、伝承より断裂が際立つような「蒼涼」のムードにせよ、この作品における二人の女性の関係は『伝奇』におけるほかの母娘と一貫性を持っているだけではなく、むしろ代表的な母娘関係だと言えよう。したがって、梁太太と薇龍との母娘関係についての考察は、『伝奇』における母娘関係の全貌を研究するのに、重要な補完的意味を持っていると思われる。

注

- 1 初版は1944年8月雑誌社に刊行されている。本稿で使うテキストは1946年上海山河圖書公司に出版された『伝奇・増訂版』を底本とする『伝奇・自絵挿図記念版』（『伝奇・オリジナル挿絵記念版』）（湖南文芸出版社 2003年）所収のものである。引用部分は原文中国語、日本語訳筆者、以下同。
- 2 初出は1943年5月『紫羅蘭』月刊第2期、本稿で使うテキストは同上。
- 3 1940年代において、半封建半植民地の上海と植民地の香港は、まとめて「洋場社

会」と称された。洋場社会の本質は、「単純に『西洋化』したわけではなく、『西洋』と『東方に固有な文明』と同盟を結ぶのである。西洋の『近代文明』に滋養を受け、庇われた、最も古き最も腐敗した封建的生活方式と封建的文化である。それこそ、40年代上海、香港の『洋場社会』における生活の最も基本的な真実である」(趙園「开向沪、港“洋场社会”的窗口」 金宏達主編『鏡像繽紛』文化芸術出版社 1998 p.5)とされている。

- 4 従来の批評はもちろん、現代のフェミニズム批評で扱われる際にも、母と娘とは区別されず、まとめて「女」として論じられることが多い。もしくは、宋家宏(1988、「張愛玲的『失落者』心態及創作」、『文芸評論』、1988年第1期)や郭力(2002、「二十世紀中国女性文学的生命意識」、『黒竜江教育出版社)が論じた「母親批判意識」のように、「母親」と呼ばれる女性に対する人間性批判に収斂されてしまう。また、平路(1999、「傷逝的周期——張愛玲作品與經驗的母娘關係」、『楊澤主編『閲読張愛玲』、麦田出版社)による作者自身の経歴を小説の人物と対照して論じるものがある。そのほか、比較文学研究として、邵迎建(2002、『伝奇文学と流言人生』、御茶ノ水書房)による母親像をめぐる張愛玲と魯迅との比較や、顧蕾(2005、『張愛玲と林芙美子の比較研究——作品における母娘關係』、名古屋大学国際言語文化研究科博士論文)による母娘關係をめぐる張愛玲と林芙美子の比較などがある。いずれの論も母親に集中し偏る傾向がある。
- 5 前掲、邵迎建(2002)p.107
- 6 「金鎖記」「傾城之恋」「沈香屑 第一炉香」「瑠璃瓦」「心経」「花凋」「封鎖」「鴻鸞禧」と「桂花蒸・阿小悲秋」の九編を指す。そのほか、「沈香屑 第二炉香」も母娘關係に触れてはいるが、外国人親子のため、本論では対象外とする。
- 7 「傾城之恋」「瑠璃瓦」「心経」「鴻鸞禧」と「桂花蒸・阿小悲秋」の五編を指す。
- 8 簡単に説明すれば、父親のかけに隠れこみ、父親と口をそろえて娘に与るか、父親のいない場合、父権制の一環として機能する、父親を代弁する「母親」として娘に関わるような形を指す。
- 9 岸辺成雄編 1979、「儒教社会の女性たち」、『世界の女性史 16 中国』、評論社
- 10 前掲の宋家宏(1988)などがある。
- 11 「傾城之恋」の白流蘇はその代表人物である。
- 12 張愛玲 2003、「自己的文章」(「自分の文章」)、『伝奇・自絵挿図記念版』(『伝奇・オリジナル挿絵記念版』)、湖南文芸出版社、pp.17-24。引用部分は原文中国語、日本語訳筆者
- 13 前掲、張愛玲(2003)「自分の文章」p.19